



ショートコメント

★★★

Data 2022-56

メイド・イン・バングラデシュ

2019年/フランス・バングラデシュ・デンマーク・ポルトガル映画
配給：パンドラ/95分

2022（令和4）年5月10日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督・脚本・製作：ルバイヤット・ホセイン
出演：リキタ・ナンディニ・シム/ノベラ・ラフマン/シャハナ・ゴスワミ/モスタファ・モンワル/バルビン・バル/ディパニタ・マーテイン

👁️👁️ みどころ

バングラデシュ発の本作の舞台は、首都ダッカにある縫製工場。小林多喜二の『蟹工船』の職場も過酷だったが、平均年齢25歳の女性ばかりの職場の労働環境は？低賃金ぶりは？職場の火災、同僚の死亡、賃金の遅滞、そんな状況下、23歳のヒロインは労働者権利団体の女性に導かれるまま、労働組合の結成に立ち上がった、その前途は？

問題意識やよし！しかし、舞台設定やストーリー展開はイマイチ平板。さらに、いくら気の強いヒロインとはいえ、ラストの展開はいかがなもの・・・？

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

◆株の動きや市場の動きについては敏感なつもり私だが、日本でメイド・イン・バングラデシュのTシャツがどの程度溢れているのかについては寡聞にして知らない。かつては「メイド・イン・チャイナ」の繊維製品が「安かろう、悪かろう」の代表だったが、そんな時期はとうの昔に過ぎ去り、今や中国の経済発展はものすごい。

私と同世代の柳井正氏が私の弁護士登録と同じ1974年に設立した「ユニクロ」は、今や衣料品業界におけるグローバル企業として君臨しているが、「メイド・イン・バングラデシュ」のTシャツはどの程度の位置付けになっているの？

◆私をはじめ観たバングラデシュ発の映画である本作は、1981年生まれ女性監督ルバイヤット・ホセインによるもの。『メイド・イン・バングラデシュ』と題された本作の舞台は、バングラデシュの首都ダッカにある縫製工場。主人公はそこで働く女性シム（リキタ・ナンディニ・シム）だが、本作のテーマは、『メイド・イン・バングラデシュ』というタイトルからはまったく想像がつかない、バングラデシュ版「蟹工船」・・・？

◆アパレル産業のあり方が問われる出来事が9年前にバングラデシュで起きたらしい。それは、先進国向けの衣料品を作る工場が集まったビル「ラナプラザ」が崩壊し、1000人以上が亡くなった、というものだ。日本では明治時代初期に「女工哀史」の物語があったが、バングラデシュでは、21世紀に入った今でも、ラナプラザは「女工哀史」と同じ

ような状況だったわけだ。本作冒頭、縫製工場で突然、火災の発生を告げる警報が鳴り響くことに。シムはなんとか逃げ延びたものの、親友の一人はその犠牲に！

◆本作の新聞紙評は多いが、そのほとんどは好意的。『キネマ旬報』4月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」でも、星3つ、3つ、4つだからそれなりの評価だ。そう思っていると、2022年4月26日付朝日新聞は、「オピニオン&フォーラム」欄で「その服 作っているのは」「バングラ工場事故 グローバル企業の搾取構図あらわに」「想像してほしい なぜその値段か 作り手の環境は」の見出しで、神戸女学院大学文学部准教授・南出和余さんの詳しい解説を掲載した。

1990年からバングラデシュと関わり、農村などでフィールドワークを続けてきた同准教授は、2年余りに希望者を募り、本作の英語の字幕を翻訳したそう。なるほど、なるほど。しかし、朝日新聞が本作にそこまで注目したのは、一体なぜ？

◆女性差別のあり方は世界各国でさまざま。第2次世界大戦で敗北した日本は、アメリカ式民主主義を取り入れる中で、いち早く男女平等（の必要性）に目覚め、その方向に切り替わっていったが、中東諸国は？インドやミャンマーは？そして、バングラデシュは？

本作では、23歳のシムが独身ではなく亭主持ちの女性であることにビックリだが、本作は全編を通じて首都ダッカにおける男女差別の実態を赤裸々に描いていくので、それに注目！バングラデシュ国内の繊維工場労働者の80%が女性、その平均年齢が25歳というデータと、本作に見る過酷な労働環境や低賃金の実態をしっかりと確認したい。

◆弁護士の私には、バングラデシュにも日本と同じような（？）労働法があることが当然だと考えているが、それはシムが労働者権利団体に働く女性ナシマ・アパ（シャハナ・ゴスワミ）と出会うところから少しずつ明らかになっていく。つまり、シムはナシマ・アパの影響（啓蒙力）によって自分の権利に目覚めていくわけだが、そんな“にわか仕込み”の知識に基づく労働組合の結成はうまくいくの？資本家との闘争は続けられるの？

新進女性監督の問題意識やよし！冒頭の問題提起もよし！シムとナシマ・アパとの“出会い”はちょっと“出来すぎ”感が強いが、映画としては演出としては、それもよし！しかし、学生運動の中で、ロシア革命をはじめとするマルクス・レーニン主義を勉強してきた私には、本作に見るシムの行動（血気）は、あまりに単純で危ういのが少し心配！

◆小林多喜二の小説（プロレタリア文学）『蟹工船』（29年）をSABU監督が映画化した『蟹工船』（09年）（『シネマ23』未掲載）は、日本の資本主義形成過程における典型的な労働争議だから、そこから学ぶべきものは多い。しかし、それに比べると、本作に見るシムの労働争議はいかにも甘い。そのうえ、にっちもさっちも行かなくなった時に、スクリーン上でシムが取る行動はいくら気の強い女とはいえ、あまりにあまり・・・？こんなスタイルがバングラデシュの労働争議の闘い方なの？いや、そんなことはないはずだ。

そう考えると、本作はレバイヤット・ホセイン監督のちょっとした勇み足・・・？

2022（令和4）年5月13日記